

報 告

初年次教育における「学生サポーター」の取り組みと学びの構造

Initiatives and learning structure of the student supporters in First-Year University Education

猿山 隆子*¹, 市橋真奈美*¹

要約:本報告は、関西福祉大学教育学部保健教育学科で開講している「大学入門演習Ⅰ」における「学生サポーター」の実験的導入事例を通じ、学習支援者である学生サポーターの学びの構造を明らかにすることを目的としている。

この取り組みの成果として、学生サポーターは、1年生の学習支援を通じて、活動の振り返りと実践のらせん的な学びを展開していることが分かった。学習サポーターは、学習支援者であるとともに、自ら学ぶ存在であるといえる。授業前のミーティングにおいて、教員とともに授業内容を確認し、どのような支援を行うかを計画する→授業で実際に支援を行う→授業後のミーティングにおいて授業の様子について振り返りを行う→ミーティングで、学生サポーターと教員が問題を言語化していくことで、状況を共有し合い、アドバイスしあう→振り返りと問題の言語化に基づいて、実践を改善し、次の授業で取り組んでいく、という一連のサイクルの営みは、言い換えれば、学生サポーターが、向き合う1年生の成長のために支援の質の向上と改善を目指して、らせん状に継続していく学生サポーターの学びの循環を意味している。教員免許取得を希望する学生が多い本学科においては、学生サポーターの取り組みは、教員免許を取得する学生にとっての新たな学習の場として捉えることができる。また、教育改善や大学運営に関わる学びの参画者として学生サポーターを適切に位置づけることができれば、教育改善や大学運営のための新たな原動力となるのではないだろうか。

Key Words: 初年次教育, アクティブ・ラーニング, 学生サポーター

1. はじめに

本報告は、関西福祉大学教育学部保健教育学科で開講している2022年度「大学入門演習Ⅰ」における学生サポーターの導入事例を通じ、学習支援者である学生サポーターの学びの意味を明らかにすることを目的としている。

大学の入学生が大学教育や大学生活に適應することを支援する教育は、古くて新しい課題である。昨今、初年次教育はますます重要視される傾向にあり、各大学ともに様々な取り組みが展開されている。たとえば、レポート、論文のアカデミック・ライティング、プレゼンテーションの技法などを教えるスタディ・スキル等の内容や、大学生としての自己理解や卒業後の進路に意識を向ける内容が含まれる。また、初年次教育においては、アクティブ・ラーニングと総称される学びとして、ペアワーク、

グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッション等を通して、自分の理解や考えを伝えるときにも、他者の理解や考えに耳を傾けながら学びを深める能動的な手法が多用されている¹⁾。アクティブ・ラーニングは、知識の伝達よりも、学生の主体的な学習を促すファシリテーションが重要となる。授業内において、ペアワーク、グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッションといった集団によるさまざまな協働を実施するためには、学生をいかに支援していくかが重要となる。こうした初年次教育における学習支援として、スチューデントアシスタント(SA)、ラーニングアシスタント(LA)などと呼ばれる学生アシスタント制度を導入する大学が増加している。

本学科が開講している「大学入門演習Ⅰ」においても、アクティブ・ラーニングとして、多様な集団による学習を多く取り入れている。そうした活動において、2022年度入学生89名が高等学校から大学へ円滑に移行するため、そして、大学の授業における能動的な学びを促すためには、きめ細かい学習支援が必要なのではないかと

2023年11月7日受付 / 2024年1月10日受理

*¹ SARUYAMA Takako
ICHIHASHI Manami
関西福祉大学 教育学部

いう考えから、2022年度の「大学入門演習Ⅰ」では、3年生のボランティアによる学生サポーターを実験的に導入するに至った。

今回取り入れた学生サポーターの制度的な特徴は、学生サポーターを務める学生と科目担当教員による授業前のミーティングと授業後のミーティングの時間を設けたことにある。このミーティングでは、学生サポーターから、毎授業での活動で多くの気づきと学びがあったことが報告されている。

そこで本報告では、学生サポーターの学びという観点から、学習支援をする学生サポーターにとってこの活動がどのような意味があったのか、ミーティングでの話し合いを中心に考察をする。

2. 「大学入門演習Ⅰ」における学生サポーターの導入

2-1 科目概要

本報告で事例として取り上げる2022年度の「大学入門演習Ⅰ」（以下、本科目）は、関西福祉大学教育学部保健教育学科（以下、本学科）が開講している1年次配当科目・卒業必修科目である。2022年度は1年生89名が受講した。本学科は、1,2年生では、AA（アカデミック・アドバイザー）と言われる担任制を採用しており、学籍番号順に組に分けられる。2022年度は、1年生は6組に編成されており、本科目には、6組のAAである6名の教員が本科目の担当教員として参画した。

本科目の授業内容については、表1に示したとおりである。本科目のねらいは、次の2点である。まずひとつ

は、(1) 高校までの知識中心の学習から多様な解のある学びへと視野を広げ、主体的に考えぬく力を習得させることにある。授業では、大学で学ぶために必要な「聴く・読む・書く・調べる・整理する・まとめる・表現する・伝える」力を育成することを目指した²⁾。具体的には、個人・ペアワーク、グループワーク、ディスカッション等、学生同士で助け合いながら学ぶ場面を多く設定し、「聴く・読む・書く・調べる・整理する・まとめる・表現する・伝える」活動を取り入れたアクティブ・ラーニング型授業を実施した。半期の授業を通して、さまざまな能力を同時に育成するようなワークを体験させることは、総合的なスタディ・スキルの育成にとって重要である。

もうひとつのねらいは(2) 大学・社会でも必要なコミュニケーション能力、創造力を他者との協働作業を通じて高めていくことである。アクティブ・ラーニング型授業のなかで1年生同士のコミュニケーションを図りながら、一人での学びだけではなく、さまざまな課題において、他者と学びを分担することで得られる喜びや、より深い学びを体感し、そのなかで自分自身を分析し、他者を理解しながら、社会と自分自身とのつながりを理解してもらいたいという願いからである。

本科目を学ぶうえでの特色としては、「振り返り」を重視したことが挙げられる。第1回目の授業で、1年生にファイル形式の「ワークシート・リフレクションノート」（以下、リフレクションノート）を配布した³⁾。このリフレクションノートには、本科目の予定表、全15

表1 2022年度の授業内容

No.	テーマ	サポーターによる支援
1	・ガイダンス ・建学の精神の理解	PC操作補助
2	・大学での学びの基礎① - 図書館ガイダンス / 個人面談	PC操作補助、仲間作りレクレーション
3	・大学での学びの基礎② - 図書館ガイダンス / 個別面談	PC操作補助、仲間作りレクレーション
4	・授業の受け方・ノートの取り方	グループ協議のファシリテーター
5	・レポートの書き方(1)	ワーク補助
6	・レポートの書き方(2)	ワーク補助
7	・レポートの書き方(3)	ワーク補助
8	書評にむけて(1)	ワーク補助
9	基礎学力の向上(1) - 数学	
10	基礎学力の向上(2) - 英語	
11	基礎学力確認テスト	
12	SEQテスト受診	PC操作補助
13	書評発表会にむけて(2)	学生への助言等
14	書評発表会	教員の作業補助
15	書評発表会	

回分のワークシートと資料、そして、授業の振り返りとして気づいたこと・考えたことなどの課題を書きリフレクションシートがまとめられている。追加の資料があれば、その都度、ファイリングしていく。1年生は、毎授業後にリフレクションノートを担当のAAに提出し、AAは、ワークやリフレクションに対して「excellent」「good」「satisfactory」「unsatisfactory」の4段階の評価と一言を記入して、次の授業開始前に受講生に返却する。

本科目は、これらの活動によって、知識や技術のハウツー学習ではなく、大学における学問での学びを意識化させ、2年次以降の「教育専門演習」へとつなぐことを目指している。

2-2 学生サポーター制度の概要

本科目において、ボランティアとして学習支援にあたったのは、12名（男性:6名、女性:6名）3年生である。いずれも保健体育教諭と養護教諭の教員免許取得を目指す学生である。2022年度が始まる3月末、本科目をサポートするボランティアを募集したところ、このメンバーが集まった。そして、このボランティアの学生を学生サポーターと呼ぶことになった。

表1に示したとおり、15回の授業のうち、10回に学生サポーターが参画した。6組のそれぞれの組に2名の学生サポーターが順番に配置され、担当教員の指示のもとに学習支援を行った。

学習サポーターによる授業内の学習支援については、具体的には、(1) 授業内でのペアワーク、グループワーク、ディスカッションなどに、教室内を巡回し、議論が停滞しているなど、支援を必要としているグループへの支援、(2) パソコンの使い方などの説明と操作補助、(3) レクリエーション、プレゼンテーションや発表会の司会進行を担当、(4) 授業内でのワークや授業終了時に書くリフレクションノートなどのライティングサポート、の支援を展開した。

このような学習支援を行うための準備としては、授業前後に、学生サポーター担当教員の2名（共著者と著者）は、学習サポーターとのミーティングの時間を設けた。(1) 学生サポーターが支援にあたる回の準備として、事前に30分から1時間ほどのミーティングの時間をもち、担当教員とともに授業の展開と支援の確認をすること、(2) 支援にあたった授業後、30分から1時間のミーティングの時間をもち、担当教員とともに、授業全体の

感想、気がついたこと、改善点などを話し合うこと、このミーティングに参加できない学生サポーターはLINE等で報告すること、で授業内容について、学生サポーター、学生サポーター担当教員の全員で共有するようにした。

この学習支援における学生サポーターの役割として重視した点に、1年生のロール・モデルの役割を担うという点が挙げられる。1年生に対して、リフレクションノートで次のように呼びかけた。

これから大学生活で皆さんがはぐくむ人間関係の一つに「先輩・後輩」という関係があります。大学生として何をしたらいいだろう、どうしたらいいだろうと考える際に、「先輩は、どうしているだろう」を参考にすると、自分の行動が選びやすくなるという状況があります。この状況を本授業では取り入れて、先輩学生が皆さんを様々な形でサポートします。彼ら彼女らは「学生サポーター」という存在です。具体的には、授業の様子を見守りながら、皆さんに話しかけたりグループワークに取り組みやすいように支援したりするボランティアスタッフです。どんどん気軽に話しかけてください。

授業では、学生サポーターに、これまでの大学生活での出来事や勉強方法などについて、先輩としての経験を語ってもらう場面を多く設けた。たとえば、これまで書いてきたレポートについて説明したり、自分のプレゼンテーションの経験から、よりよいプレゼンテーションのポイントについてアドバイスしたりするなどである。こうした経験を語ることを通じて、学習サポーターが1年生のロール・モデルとしての役割を担い、1年生が大学生活の見通しをもってもらうことを意図した。

前期の最後の授業で1年生に学生サポーターについてのアンケート調査を行った。その結果をみると、1年生にとっては身近で、親しみやすく、相談しやすい存在であり、学生サポーターの取り組みは、1年生には高い評価を得ている。

3. 学生サポーターによる学びの循環 —ミーティング記録から—

3-1 学生サポーターによる振り返り

毎授業後のミーティングでは、その日に参加した学生サポーターが授業での自分の動きや受講生の反応などを報告し、気づいたこと・感じたことを述べ、学生サポ-

ター担当教員2名のファシリテートのもとに議論した。

主に以下の点を振り返りのテーマにして話し合いが行われた。

- (1) 本日の自分の支援内容
- (2) 受講生の反応
- (3) 本日の授業の進め方について
- (4) 学生サポーターとして難しいと感じたこと
- (5) 学生サポーターとして、やりがいや楽しさを感じたこと
- (6) 次回への改善点

学生の振り返りでは、一部ではあるが、以下の点が挙げられている。

- ・教員でもなく、仲間でもなく、サポーターという曖昧な立ち位置である。
- ・学生との距離感が難しいと感じた。
- ・1年生同士で議論が白熱しているときは介入しないようにした。
- ・1年生が、大学生活（テストのこと、授業のことなど）を聞いてきてくれるので、自分たちの経験を話すことが役に立っているようだ。
- ・1年生一人一人のペースが違うため、全体としてどのようにまとめるかの判断が難しい。
- ・自分たちの働きが仲間づくりの力になっていることにやりがいを感じた。
- ・教えてくださいと聞いてくれたり、お礼を言ってもらえたり、少しでも1年生の力になれていることが嬉しい。
- ・組別での活動のとき、雰囲気づくりが難しかった。
- ・回数を重ねるにつれて受講生同士がしゃべるようになってきたり、表情が明るくなってきたりして、雰囲気がよくなってきた。
- ・サポーターが考えて行った活動によって、担当する組の学生の関係性が深まっていく様子を見るとやりがいを感じる。
- ・自分たちが感想やアドバイスを言うときに、1年生が聞いている様子があるとうれしい。
- ・担当教員と学生サポーターの事前の入念な打ち合わせと連携が必要だと感じた。
- ・担当の組だけでなく、教室全体の動きを事前に把握しておく必要があった。
- ・もっと自分から1年生に関わって、自分の学びや経験

を増やしたいと思った。

3-2 振り返りと実践のらせん的な学びの展開

学生サポーターの効果として、1つ目に学生サポーターが、他の学生サポーターとともに協働することで、様々なことを学び、成長していくという側面が挙げられる。学生サポーターは、授業後のミーティングで上述の報告をしながら、その都度、授業を振り返り、学生サポーターとして難しい点・困った点や、学生サポーターとしての取り組みや授業の改善点を確認する。学生サポーターとして難しいと感じたことや改善点が挙げられると、学生サポーター同士で同じような場面で自分はどうしたか、ということをお互いに教え合ったり、こうしたらよいのではないかと互いにアドバイスし合ったりしている。たとえば、教員と学生サポーターとの連携がうまくいかず、各組ごとの活動がうまく進まないことがあった。学生サポーターたちは、ミーティングでくり返しそうした状況を共有し、どこに問題があるのか、受講生らによりよい学習環境を提供するために現状をどのように修正することができるか、そのために教員とどのように連携していくかを考え、アドバイスをし合った。そのアドバイスのもと、学生サポーターたちと教員が話し合い、支援方法を工夫することで、徐々に教員と学生サポーターとの連携がスムーズになった。

こうした一連の出来事から、ミーティングを通じた学生サポーターの振り返りと実践のくり返しは、1回限りのものではなく、継続的に展開していることが分かる。事前のミーティングで教員とともに授業内容を確認し、どのような支援を行うかを計画する→授業で実際に支援を行う→授業後のミーティングにおいて授業の様子について振り返りを行う→ミーティングで、学生サポーターと教員が問題を言語化していくことで、状況を共有し合い、アドバイスしあう→振り返りと問題の言語化に基づいて、実践を改善し、次の授業を計画し、実践していく、という一連のサイクルの営みは、学生サポーターによる学習支援という行為は、常に、教える内容が1年生に届いているかを、学生サポーターと教員がともに確かめながら継続される省察的な行為であるといえる（図1）。

言い換えれば、学生サポーターが、向き合う1年生の成長のために支援の質の向上と改善を目指して、らせん状に継続していく、学生サポーターの学びの展開を意味している。

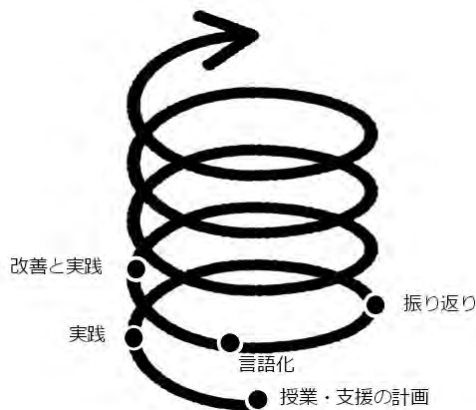


図1 学生サポーターの振り返りと実践のらせんの展開

3-3 学生サポーターと教員との流動的な関係性

学生サポーター制度における効果の2つ目は、「学生—教員」の関係が流動的な関係性で結ばれるという点である。普段の授業においては「教員—学生」という関係は固定化されたものであるが、本科目においては、学生サポーターは、学生と教員のあいだで流動的な立ち位置をとっており、2つの視点で授業構成を見ている。筆者が担当した回の授業に関して、授業後のミーティングでは、1年生の授業の様子から、授業内で行ったワークのテーマが1年生には難しかったのではないかと、もう少し説明を付け足した方がよかったのではないかと、学生サポーターによって率直な意見が出された。筆者も、学生サポーターに、ではどのような課題が適しているのか、どのような説明がよいだろうか、など、授業の進め方や課題について意見を求めたり、学生サポーターの経験を尋ねたりした。こうしたことは、授業構成を考えていくうえでおおいに参考になった。

こうした学生サポーターと教員の関係性は、学生サポーターが学生でありながら、教員とともにある学習支援者でもあるという2つの側面をもった独自の立場から授業に参画している存在であるからこそ成り立っているといえる。

4. 成果と課題

本科目において、学生サポーターを実験的に導入することを通して、学習サポーター自身が、教え、教えられる過程で成長していくという側面があることが明らかになった。学生サポーターの取り組みを通じた学習という視点に立てば、学生サポーターは、それ自体が体験的な学習である。

学生サポーターは、学習支援者の役割として、①授業

で必要な知識・技術を教える役割、②1年生にとってのロール・モデルの役割、③1年生同士、教員と1年生をつなげる役割、を担ったといえる。これらの役割のなかで、学生サポーター自身が、よりよい授業支援を行うために、活動成果からの省察という学びの循環が生まれることが分かる。この学びの循環から、学生サポーターによる学習支援という行為は、一方から他方へと単線的なコミュニケーションで完結するものではなく、常に、教える内容が1年生に届いているかを、学生サポーターと教員がともに確かめながら継続される省察的な行為であるといえる。また、教員と学生サポーターの教える側、1年生の学ぶ側の両方で作り上げる創造的なコミュニケーションであるといえる。

学生サポーターの取り組みは教員免許を取得する学生にとっての新たな学習の場として捉えることができる。そして、授業改善や大学運営に関わる学びの参画者として学生サポーターを適切に位置づけることができれば、授業改善や大学運営のための新たな原動力となるのではないだろうか。

註

- 1) 初年次教育学会『進化する初年次教育』2018年、世界思想社、濱名篤・川嶋太津夫編『初年次教育—歴史・理論・実践と世界の動向—』2006年、丸善株式会社
- 2) 本科目は、以下の点を到達目標に定めシラバスに示している。
「①自己の個性を理解し自己実現をはかるためには何が必要かを考え、大学での学びに主体的に取り組む。②大学での学びに必要な基礎的な知識や技能について理解し、情報収集やレポートの作成、プレゼンテーション技能を習得する。③各自が施行するとともに、グループ・ディスカッションやレポート作成を通じて、自分の考えを表現する力を身につける。」
- 3) 「ワークシート・リフレクションノート」は、本科目のために主担当教員である共著者が作成したものである。

【引用・参考文献】

- 加藤徹郎.(2023). 協働学習の主体における正統的周辺参加～実践コミュニティとしてのSA制度～. 淑徳大学人文学部研究論集.
- 河合塾.(2010). 初年次教育でなぜ学生が成長するのか 全国大学調査からみえてきたこと. 東信堂.
- 岩崎千晶.(2020). 初年次教育における学生スタッフに対して教員が求める能力・経験の導出. 日本教育工学会論文誌.
- 向後千春.(2016). 18歳からの「大人の学び」基礎講座. 北大路

書房.

初年次教育学会.(2018).進化する初年次教育.世界思想社.

千葉美保子.(2021).初年次教育における学生アシスタントの支援効果と課題に関する一考察-甲南大学共通教育科目の受講生アンケート調査結果から-.甲南大学教育学習支援センター紀要 第6号.

立山博邦.(2013).大学におけるスチューデント・アシスタント(SA)制度の考察-日米比較の視点から-.立命館大学『社会システム研究』.

鈴木克明・美馬のゆり.(2018).学習設計マニュアル 「おとな」になるためのインストラクショナルデザイン.北大路書房.

濱名篤・川嶋太津夫.(2016).初年次教育-歴史・理論・実践と世界の動向-.丸善株式会社.